授業科目名・形態	助産学実習Ⅰ　　実習	必修・選択の別	選択	単位数	5
科目担当者氏名	工藤　優子　他	実務経験の有無	有	開講期	４年前期

【授業の主題】

妊娠期・分娩期・産褥期・新生児期にある対象の身体的・心理的・社会的側面、地域や家族関係から多面的に情報を収集し、立案した計画に沿って助産過程を実践する。さらに提供した分娩介助およびケアを客観的に振り返り、自己の課題を明確にして次の介助とケアに活かし、学びを深める。

また、母子保健医療チームの一員としての助産師の役割を理解し、看護者としての必要な倫理的義務や責任について学ぶ。

【到達目標】

1. 妊娠期・分娩期・産褥期および新生児期の助産過程を実践できる。
2. 継続事例の受け持ちを通して、妊娠期から産褥・新生児期まで継続した個別的なケアを提供できる。
3. 提供した分娩介助およびケアを客観的に振り返り、自己の課題を明確にして次のケア提供に活かすことができる。
4. 専門職としての役割・責務を認識した行動を学ぶ。

【授業計画・内容】

1. 産婦を受け持ち、助産過程を実践する。正常分娩の介助を 10 例程度実施する。（継続受け持ち事例を含む）
2. 継続受け持ち事例をのぞく分娩介助をした 9 例のうちの 2 例の褥婦と新生児を退院まで受け持つ
3. 継続受け持ち事例を妊娠期から産褥１ヶ月まで受け持つ。
4. 継続事例の分娩開始・入院から受け持ち、分娩各期の観察および分娩介助を含む助産ケア・新生児の出生直後のケア・健康診査を実施する。退院まで継続事例母子を受け持ち、助産ケア・保健指導を実施する。
5. 受け持ちの産婦が異常に移行した場合は、実習指導者の指示に従い直接的なケアについて見学を通して学ぶ。
6. 実習内容は実習指導者と相談の上で決定し、実習計画の発表・調整・報告を行いながら、主体的にのぞむ。
7. 評価表を用いて、各段階における到達目標の評価を行い、自己の課題と目標を明確にする。

＊その他の計画・内容の詳細は、別途実習要項を参照。

【授業実施方法】

臨地実習

【授業準備】

これまでの学習内容、および教科書・資料・参考文献を復習し、分娩介助技術を習得しておくこと。

【主な関連する科目】

助産学概論、基礎助産学、助産診断・技術学Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ、助産管理論

【教科書等】

助産学講座１～８　医学書院、各授業で配布した資料など。

【参考文献】

日本助産診断･実践研究会：実践　マタニティ診断第４版　医学書院
北川眞理子、内山和美編：今日の助産　改訂第３版　南江堂
武谷雄二他監修：プリンシプル産婦人科学２　産科編第３版　MEDICAL VIEW
日本産婦人科学会/日本産婦人科医会編集・監修：産婦人科診療ガイドライン　産科編 2023　日本産婦人科学会
その他は、適宜提示する。

【成績評価方法】

実習評価 40%　実習記録 40%　事前学習 10%　実習への取り組み等 10%とし、総合的に評価する

【実務経験及び実務を活かした授業内容】

助産師としての実務経験を踏まえ、実際の臨床における状況を重視し受け持ち対象に対する助産ケアの理解が深まる様に指導している。

【学生へのメッセージ】

これまで学習した全ての知識・技術を活用して、助産過程を実践する大切な実習です。24 時間体制の実習になりますから、自己の体調管理に留意し、受け持ち事例ごとに学んだことを蓄積し実りのある実習にしましょう。